

十三章 詩人であり医師であるワルター・フォークトとの文通

私が、LSDのおかげで知り合うようになった人物のなかに、医師であり、精神医学者であり、かつ文筆家でもあるワルター・フォークト医学博士の名をあげることができる。彼との交流は、以下に抜粋した往復書簡でも明らかのように、LSDの医学的側面が彼の医学者としての興味をそそったというよりも、むしろ意識の変容をうながすLSDの心理学的効果が、その詩人としての関心を喚起したためであるといえよう。われわれの文通の大部分は、そのようなテーマをめぐるものであった。

ベルン市ムーリにて

一九七〇年十一月二十二日

敬愛するホッフマン殿

私はゆうべ、ローマのある親しい家族から、喫茶店でお茶をよばれる夢をみました。この家族は

ローマ法王とも知己の間柄で、法王がわれわれと同席なさっております。法王は白ずくめの装束で、さらに白いミトラ（訳注 司教の典礼用冠）をつけ、静かに席についておられ、非常に威厳がありました。

その席で私は、もしお望みであるならば拙著『机の上の鳥』を名刺がわりに謹呈したいのだがと法王に申し出たのです。その本について、イタリア語の訳者が、私の本のなかでも最高の傑作として推賞してくれてはいましたが、私の著書の中に、法王に読んでもらえるような聖書外典に相当する本が一冊もないことを、今まで不幸にも反省してみるものがなかったことに気づきました。（ただ、法王に謹呈する気になったのは、法王がイタリア人である、というそれだけの気持で……）

おそらくあなたも、この小作品には興味を持っていただけだと思います。これは一九六六年に書かれたものですが、当時の私はサイケデリックな薬物をまったく使った経験がありませんでした。で、この薬物の医学的実験に関する報告に対して、ほとんど理解することができませんでした。その点については現在もあまり変わってはいませんが、ただ別の側面に私の注意点を向けることができるようになっていきます。

私の作品（また、その特徴的表現）について、あなたは母音接続（訳注 ここでは主だったもの同士を結びつけるものを比喻している）が役割を演じているのに気づくでしょう。（それは、ローランド・フィッシャーが述べているようなサウルからパウロへの改宗と同じようにはいかないでしょうが……）。そうなれば私の書くことは今よりもさらに現実味を増すことになるでしょうし、少な

くとも極端なものとならずに済むでしょう。

私のテレビ番組『権力の戯れ』での冷静な現実主義を、私は少なくとも見失いたくはないのです。もしもそれがどこかに存在するとするならば、それをいろいろな表現によって証明したいのです。

あなたが私の仕事に関心を持たれ、また暇がありましたら、話し合いに一度来ていただければ誠に嬉しいのですが。

ワルター・フォークト

ブルク・i・Lにて

一九七〇年十一月二十八日

親愛なるフォークト殿

私の机の上に飛んできた鳥が、ここまでのような道のりでやってきたかを私はすでに知ることができるので、それはすべてLSDの魔術的な効果によるものです。私は間もなく、一九四三年に行った例の実験で、私が体験したすべてについて本を書くつもりでいます。

.....

アルバート・ホッフマン

一九七一年三月十三日

親愛なるホッフマン殿

日刊紙『ターゲス・アンツァイガー』に掲載された、ある使徒の「接近」に対する批評を添付します。おそらくあなたは、これに興味を寄せられるでしょう……。

……

幻覚をみるとか、夢をみるとか、あるいは著作するということは、それぞれの日常の意識とは対照的であり、かつ相補的な機能のように思われます。むしろここで私が語れるのは私自身の体験を通してだけのことです。そのような事柄を他人に話すのはほんとうに難しいことです。つまり人によって話すことばが様々だからです。……

……さて、あなたは、すでに多くの人の「署名」を蒐集しており、そのコレクション中に私の手紙も入れてくださるとのこと、誠に光栄に存じます。そこで私は、ここに私の「遺言状」を同封することにします。この草稿の中では、あなたが発見された、つまり「二十世紀における画期的な発見」がある大切な役割を担っているわけです。

ワルター・フォークト

ここに、ワルター・フォークトの

最も新しき遺言を、一九六九年に記す

私には、豪華な葬式などいらぬ

高価で、濃艶な蘭の花も

その名の記憶すらおぼつかなき

数多くの小鳥たちも

ヌード・ダンサーの踊りさえも

私にはいらぬ

ただ

サイケデリックな窓枠を

四方にスピーカーをとり付けて

ビートルズの最新レコード(注1)のみを

幾度となく、果てしなく、

回転し続けて欲しいのだ

そのエンドレス・テープから聞こえる声は

“お気の召すままに(注2)”

そのほかは何もいらぬ

金色の後光のさした

ありきたりのキリスト像と、

愛すべき喪中の隣人たち

すっぱい(注3)リンゴ酒を傾けて

“彼らが天国に行くまでは(注4)”

ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな”

きつとそこで出会うだろう

アルバート・ホッフマン博士へ

早春を迎える心からの喜びと共に

一九七一年

注1 ビートルズのレコード “Abbey Road” をよす。

注2 同じく “Blind Faith” の歌詞の一節。

注3 すっぱい⇨酸⇨LSDを意味する。

注4 “Abbey Road” のB面から。

一九七一年三月二十九日

親愛なるフォークト殿

すばらしい手紙と、貴重なご署名入りの一九六九年の「遺言状」を送っていただき、誠にありが

とうございました。……

……

私は最近、きわめて奇妙な夢をみました。そして、夕食の（化学的）成分と夢の内容との関連性について調べてみようという気になりました。LSDもいわば一種の食べ物ですから……

アルバート・ホッフマン

一九七一年五月四日

親愛なるホッフマン殿

LSDについて順調にいつています。今われわれは、研究プログラムを組んで行うという構想は捨て、一種の「自己体験グループ」を診療所で作ることから始めたいと思っています。むしろそちらの方が理に適った方法だと思っています。

私は、来年は外来と内勤の合間をぬって、純粹に文学に浸れる時間を少しでも持ちたいと思っています。とにかく主著として、とりわけ長い散文を書かなければならないのです。それについて、まだ漠然とした輪郭しか描けていませんが……おそらく、その中で、あなたの発見したものは重要な役割を演ずることになると思います……

ワルター・フォークト

親愛なるホッフマン殿

一九七一年九月五日

晴れわたった秋空の続くこの週末を、私はムルテン湖(注5)で過ごすためにやってきました。ここで私はしばしばあなたのことを想い出しています。昨日の土曜日、私はアスピリンを一錠飲んだ(頭痛のため、あるいは軽い風邪かもしれない)ために、まるでメスカリンを使ったときのように(メスカリンはただ一度、しかもごく少量使ったことがあるだけなのですが)、まったく奇妙なフラッシュバックを感じました。……

私はきのこに関するワツソンのたいそう興味深い論文を読みました。彼が、人間をキノコ狂信者と、キノコ恐怖症者に分類しているのは興味深いことでした。……あなたの近郊の森の中に、今美しいベニテング茸が生えているに違いありません。一度、試してみられてはいかがですか。

ワルター・フォークト

注5 奇しくもその日曜日に、私(アルバート・ホッフマン)も、E・Iという友人と、彼の持つ気球に一緒に乗せてもらって、ムルテン湖上空を飛行していた。

一九七一年九月七日

親愛なるホッフマン殿

あなたが飛行した気球の下の、陽のあたる小径において、私は何をなしてきたかを、ぜひあなた

にお知らせしなければなりません。私はようやくオロン近郊の別荘（リアリ博士のところ）を訪ねることができましたが、その折のことについての覚え書きがここにあります。湖上には、フェリーニの映画から飛び出してきたようなヒッピー族の自家製のヨットが三本マストをつけて滑走していました。私はそれをスケッチし、そのヨットの上に、あなたの気球を描き入れました。

.....

ワルター・フォークト

一九七二年四月十五日

親愛なるフォークト殿

あなたのテレビ番組『権力の戯れ』を拝見して、私は非常に感銘を受けました。

そのすばらしき作品に対して、私の賛辞を贈りたいと思います。それは、われわれが日頃、いかに精神的に病んでいるかを自覚させてくれましたし、またそれによって「意識を拡大する」効果が十分にあったと思います。その意味で、あの番組は古代悲劇と同様に、より高度な意識において行われた一種の精神療法的役割を十分に果たしているものと思われまます。

アルバート・ホッフマン

一九七三年五月十九日

親愛なるフォークト殿

あなたの『しろうとの説法』、つまりあなたのシナイ半島旅行(注6)を題材とした、その手記と解
 釈をもう三度も読み返しました。……おそらく、それはLSDの旅を意味しているのではないでし
 ょうか。……説教のテーマの中で、薬物体験といった非日常的世界を取り扱うのは、たいそうに奇
 抜で大胆な着想だと思います。

注6 ワルター・フォークト著の『私のシナイ旅行——しろうとの説法』(Walter Vogt: Mann Sinai-Trip.

Eine Laienpredigt. Verlag der Arche, Zürich, 1972.)

この著作には、ワルター・フォークトがリヒテンシュタインのヴァードーツにあるプロテスト教会のクリ
 ストフ・メール司教から招かれて、一九七一年十一月十四日に行った説法(作家の説法という限定条件つ
 きで)の原文が載せられており、それにはさらに、著者と司教の魅力的なあとがきが添えられている。

ここで扱われている内容を、LSDによってひきおこされる陶酔的・宗教的体験の描写と解釈すること
 ができる。著者は、「もしもあなたが、偉大なるモーゼのシナイ旅行に皮相的なアナロジーしか読みとる
 ことができないうならば、あなたはさらに深みに入ってごらん下さい」と述べている。そうすることによっ
 て、この深みの中で、「総主教の威厳」を感じるだけでなく、さらに聖書の原句の行間から読みとられる
 ようなより深い関係を知り、それはより深いアナロジーを生み出すことになるであろう。

しかも、あなたが幻覚剤の力を借りて口にされた問いは、本来教会において当然に感じられるべ
 き啓示だと思われず。なぜなら、その幻覚剤は、宗教儀式において用いられても決して不思議で

はない薬だからです。(LSDは化学構造上も、またその幻覚的効果においても、古くから宗教的に用いられた薬種のピョトル、テオナナカトル、そしてオロリュキュイと最も近い類縁関係にあるからです。)

あなたが今日の宗教上の信仰心について言及されていることに、私もまったく賛成です。また、あなたが示唆された三つの意識状態(つまり、われわれが常に働き、己の義務を遂行できる覚醒状態、アルコールによる酩酊状態、そして睡眠状態)と、サイケデリックな恍惚の二つの様相(第一の様相では、旅の高みにあり、そこでは宇宙世界的体験がなされている。言い換えれば、自分自身の身体的感覚に深く沈潜し、外界のあらゆる対象はすべてその中に集約されているというような状態。第二の様相は、その高められた様態を象徴的に理解し、またそのように特徴づけられている状態である)の区別や、幻覚剤によってひきおこされた意識の開放性は、根源的な意味において、幻覚的酩酊状態を実に的確に考察し、評価したものだといえます。

私自身のLSD体験から得られた理解しうる主な特徴は、肉体と精神が解き離れ難く絡み合った体験です。それはまさに『物質におけるキリスト』(テイヤール・ド・シャルダン著)そのものです。新たななる予言を享受するためには、われわれ自身が「肉体であり、その肉体の中に」沈潜していかなければならないという認識が、この薬物体験によって初めてもたらされるでしょう。

次に、あなたの説法に関する批評を僭越ながら、ちよっぴり付け加えさせていただきます。あなたは、「あらゆる経験のうちで最も深遠なものは『神の国があなたの中にある』という体験で

ある」とティモシー・リアリに言わせています。この命題には、それに先立つ課題の引用がないために、誰しもキリスト教の中心的真理を何一つ、あるいは正しく理解していないという誤解を生ずる危険性があります。

あなたがここで検証していることは、「忘我を伴わない宗教体験はありえない」という普遍的知を述べようとしていると思われるのですが……

来週の月曜日の晩、私はスイス・テレビのインタビューを受けることになっています。（『真相』という番組の中で、私はLSDとメキシコの魔法の薬について話すことになるでしょう。）インタビューの諸氏が、どのような質問をしてくるかを楽しみにしています。

アルバート・ホッフマン

一九七三年五月二十四日

親愛なるホッフマン殿

……

ご指摘のように、もちろんそれはLSDのことです。実は、私自身がLSDについてよく理解していなかったもので、ただはつきりと書きたくはなかったのです……。薬物を実際に体験したりアリ氏をいわゆる生き証人として立てる場合には、もちろん講演とか説法の際にのみなされるべきであったと思います。

私はここで白状しなければなりません。われわれが「肉体であり、その肉体の中に」沈潜していかなくてはならないという認識が、実はLSD体験を通して、私は初めて知ることができたのです。LSDは若者にとってタブーとされるべきもの（タブーといってもまったくの禁忌を意味するのではなく、それを使う時機を見極めるべきという意味であると思いますが……）であるとするあなたの見解を、私はますます支持するようになってきていますが、むしろそのような認識を持つようになるのが事実「あまりにも遅すぎた」のではないかと反省しております。

……

「忘我を伴わない宗教体験はありえない」というあなたのお気に入りの命題は、他の人たちにとってはそれほど満足のいくものではないようです。たとえば、私の（ほとんど無二の）文学上の友であり、牧師であり、かつ叙情詩人クルト・マルティーは、おそらくこの命題を受け入れるわけにはいかないでしょう。……しかし、いずれにしても、その実用的見地から、われわれは意見を異にしているわけですが、それはともかくとして、何らかの機会に呼びかけ合って、おそらくスイスで最も小さい「ミニ・マフィア」として運動を進めていこうではありませんか。……

ワルター・フォークト

一九七四年四月十三日

親愛なるフォークト殿

ゆうべ、あなたのテレビ番組『沈黙したキリストの前のピラト』をほんとうに息づまるような気持ちで見ました。そして非常に共感いたしました。

……人間と神の関係の描写について……つまり、たいへんな難問をかかえて神のもとにやってきた人間は、神が沈黙を守っているために、ついには自分自身で答えなければならなくなる。神は決して、人間に対してことばでは答えてくれない。ただ、その答えは、神の天地創造の本（問いを発している人間自身その中に属している）の中に書いてある。真の自然に対する研究こそが、すなわちこのテキストの解読なのである。

アルバート・ホッフマン

一九七四年五月十一日

親愛なるホッフマン殿

……

……夢うつつの状態のなかで、一つの「詩」を作ってみました。それをあなたにお見せしましょう。私はまず最初にリアリに贈ろうと思いましたが、しかし今の彼にとっては、「何の意味もない」ものでしょう。

牢獄につながれしリアリ

ゲルプケは死んだ

クアは収容所にいる

これがあなたのサイケデリック革命なのか

われわれが深刻に考え過ぎてしまったのだろうか

ただ遊びに使うだけのものを

それとも

その逆なのか

ワルター・フォークト

フォークトの詩に含まれるこれらの問い、すなわち、われわれは、ほんの遊びにすぎないものを、まじめに考え過ぎてしまったのか、それともその逆なのかという問いには、心理的な薬に関する仕事に常につきまとう、根本的な二律背反を、まさしく的確に表現したものであるといえよう。